

平成28年度 編入学・学士入学試験問題

学類名	人間発達文化学類	科目名	小論文
-----	----------	-----	-----

問題 I

下の文章を読み、“歴史的な観点からみたゴースト・ライティング”について400字以内で述べなさい。

科学出版の世界で、オーサーシップへの関心が強まったのは1990年代になってからである。当初は、多数著者やギフト・オーサーシップについて論じられ、ゴースト・オーサーシップが話題になったのは、最近のことである。

ただし、ゴースト・ライティングやゴースト・ライターは、古くから登場している。読み書き能力が低い時代には、代書屋は必要であり、公認のゴースト・ライティングともいえよう。19世紀のフランスの劇作家エドモンド・ロスタンは、17世紀のパリを舞台にした「シラノ・ド・ベルジュラック」で成功を博したが、そこではシラノによるロクサーノへの恋文の代筆が、重要な役割を果たしていた。代筆や代書は、現代でも行われており、オバマ大統領の演説草稿は、大統領の意向を理解した20歳代の専属スピーチ・ライターにより執筆されている。政財界はもとより、エンターテインメントの世界でも、ゴースト・ライティングは、広く行われている。文学修行中のライターが、著名人やスター本の代筆を行うのは、よくある事例であろう。職業としてのゴースト・ライティングは、中世以来しっかりと定着している。

オーサーシップへのこだわりは、歴史的に考えると、近年の科学発表をめぐる状況とでは、異なっていたのだろうか。初期の学術雑誌では無著者(anonymous)の記事も多く、意図的な匿名記事も掲載された。実際の著者はインフォーマルに認識されていたが、著作を教会や権力者にさざげ彼らの名で出版することもあった⁽¹⁾。また、先取権や公表に執着しない研究者もいた。18、19世紀のイギリスの偉大な物理学者として科学史に記されたヘンリー・キャヴェンディッシュは、優れた実験成果を一切公表しなかった。「彼は公表するために論文を書き上げることはしなかった。要するに、彼は自分以外の世界にほとんど関心をもたず、自分だけが楽しむために科学知識を追求していたにちがいない」とザイマン(Ziman)は述べていた⁽²⁾。

昇進やより良いポストといった圧力や、産学連携による研究の商業化などが、研究活動を進めるインセンティブではなく、未知なる世界の解明という知的好奇心が研究を支えていた時代とでは、オーサーシップへの執着は違っているだろう。近代の研究者でも、オーサーシップを放棄し、レポートや実験結果に名前を入れない事例もある。米国における原水爆開発などの軍事研究に参加した研究者は、“publish or perish”に示されたプレッシャーに悩むことなく、研究資金への心配もせず、与えられた課題に「自由に取り組める」と述べていた⁽³⁾。

大学を舞台に考えると、学生の試験レポートの代筆サービスや、博士学位論文のゴースト・ライティングも存在し、ディプロマ・ミルと呼ばれている博士学位を販売している機関もある。日本の大学教員にも、海外のディプロマ・ミルから学位を得て、昇進や箔付けに活用している人もいる。ゴースト・ライティングは、社会のさまざまな場面で存在している。

⁽¹⁾ Wagner E Authors, ghost, damned lies, and statisticians. PLoS Med 2007; 4; e34.

⁽²⁾ Ziman J (松井巻之助訳). 社会における科学(上). 東京:草思社;1981. P. 93.

⁽³⁾ Gusterson H. The death of authors of death. In:Biagioli M & Galison P., editors. Scientific Authorship. New York: Routledge: 2003. P.281-307.

平成28年度 編入学・学士入学試験問題

学類名	人間発達文化学類	科目名	小論文
-----	----------	-----	-----

問題Ⅱ

下の文章で説明されている段落構成法 A, B, C それぞれの長所と短所を、自分の考えに基づき、計400字以内で解説しなさい。

段落には「意味段落」と「形式段落」の二種類があります。意味段落を用いる場合には、たとえ長くなっても、一つの意味内容は一つの段落を使って書き、段落を変えません。それに対して、形式段落を用いる場合には、読み手の読みやすさを意識し、たとえ意味内容が同じであっても、適当なところで段落に切り、形式的に段落を作ります。分け方は読みやすさという基準を満たしていればよく、「適当なところ」ですから、とくに規則のようなものではありません。

ほとんどの日本語の文章では、「形式段落」を用いています。ですから、意味内容としては一つのことについて書いてあっても、いくつかの「形式段落」に分かれていることが多くあります。たとえばこの本でも、読みやすさに配慮して形式段落を用いています。

「意味段落」の特徴は二つあります。

- ・段落の先頭に中心文 (=キーセンテンス) を配置すること
- ・中心文と関係のない文は、同じ段落内には置かないこと

その段落で扱う主題 (=問題) や述べたいこと (=結論) がまとめられた中心文を基準にして、それとは関係のない文章を同じ段落には置かないことで、文章は格段にわかりやすくなります。たとえ、形式段落を使って書く場合でも、このような意味段落を適当な長さに分けていけば、同じ構造が保たれることになります。以下に、具体的な文章で見えていきましょう。

まず、次の簡単な文章を読んでみてください。中心文に焦点を当てて考えた場合、日本語には、次のような三種類の並べ方があります(『作文王トップレベル』より一部修正の上、引用)

A その日はため息が出るほど退屈な一日だった。朝、いつもの時間に起き、いつものトーストを食べた。いつもの時間に学校に行き、いつもと同じ退屈な授業を聞き、いつもと同じ時間に帰った。その後、宿題をしてテレビを見た。面白いものは何もやっていないので、テレビを消そうとしたけれど、だらだらと寝るまで見てしまった。そして退屈なままあくびをしていたら、もう就寝時間がきてしまった。

B 朝、いつもの時間に起き、いつものトーストを食べた。いつもの時間に学校に行き、いつもと同じ退屈な授業を聞き、いつもと同じ時間に帰った。その後、宿題をしてテレビを見た。面白いものは何もやっていないので、テレビを消そうとしたけれど、習慣的に寝るまで見てしまった。そして、退屈なままあくびをしていたら、もう就寝時間がきてしまった。その日はため息が出るほど退屈な一日だった。

平成28年度 編入学・学士入学試験問題

学類名	人間発達文化学類	科目名	小論文
-----	----------	-----	-----

C その日、寝坊してしまっただので、あわてて朝食を食べて学校に向かった。途中、電車が事故で止まり、遅刻しそうになって学校にぎりぎりで飛び込んだ。ところが、朝、あわてて家を出てしまったため、せっかくやっていた宿題を家に忘れてきてしまった。それやこれやで、あせってしまい、その日のテストでも簡単なミスをしてしまった。

A, B, C は、それぞれ中心文について違いがありますが、A では先頭、B では最後に置かれ、そしてCにはその中心文がありません。確認してみてください。ときには、中心文が真ん中あたりにくる場合もあるのですが、日本語の文章はおおむねこのA, B, C のうちのどれかと思って差し支えないでしょう。そして、ほとんどの私たちはあまり意識することなく、中心文のないCのような文章を書いていることが多いと思います。

どれが正しくどれが間違いということはありません。ここに挙げた例文は、とても簡単な内容なので、A も B も C もわかりやすさに差は生じてきませんが、少々難しく複雑な文章を書くときや、あるいは、きちんとした論文やビジネスの報告書など、明確さとわかりやすさが要求されている文章では、A の型が望ましいでしょう。日常書く、ブログのように、かしこまらずにさらさらと書く文章はC でもいいかもしれませんし、従来の日本の文章にはB の型のものが多く見られました。ただそれは最後まで読まなければ何を言いたいのかわからないのが欠点と言えます。

平成28年度 編入学・学士入学試験問題

学類名	人間発達文化学類	科目名	小論文
-----	----------	-----	-----

問題Ⅲ

下の文は「趣味」について論じた学生のレポートです。内容を参考にしながら、あなたの「趣味」についての考えなどを400字以内で述べなさい。

《趣味》独：*Geschmack*, 英：*Taste*

この部分に記載されている文章については、著作権法等の問題から公表することができませんのでご了承願います。

平成28年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 編入学および学士入学

人間発達文化学類のアドミッション・ポリシー「人間の発達と文化の探究・創造に関心を持ち、現代社会が直面する人間の発達支援の課題に積極的に貢献しようとする学生を受け入れます」をふまえつつ、資料を与え、1,200字程度で論述させることにより、受験者の理解力・思考力・表現力を総合的に判断する。

問題Ⅰでは、研究倫理に関する文献を読み、研究に対する姿勢を考え、それを論じる能力をみる。

問題Ⅱでは、段落の構成法に関する文章を読み、自分の考えもまじえながら、その文章について解説する能力をみる。

問題Ⅲでは、他者の認識や考え方、論じ方に触れ、その内容を理解するとともに自分の考えを抱き論じる能力をみる。